

◆ 本当の発展のために

世界中で蔓延している感染症や未だ明確な治療法のない病気に対する医療の問題、温暖化や海洋汚染等に係る環境問題への対応など、持続可能な開発に立ちほだかる問題を解決していくには、あらゆる才能を「総動員」することが必要です。

そして、この総動員には多くの女性を取り込むことが重要であり、多様性を発揮した研究は、才能あふれる研究者の数を増やし、新しい視点や創造力を生み出します。

この多様性を重視した国連は、2015年の総会で「科学における女性と女兒の国際デー（2月11日）」を制定しました。これは、女性や女兒が科学の分野に、完全かつ平等に参加できる機会の促進と活躍できる場を増やすことを目指し、「女性と女兒が果たす重要な役割を認識し評価する」ことを目的としたものです。

しかし、日本では科学分野への女性の進出が、さほど進んでいないという現実があります。OECD（経済協力開発機構）は2021年の調査報告で、日本の状況を「高等教育新規入学者で工学、製造、建築を専攻する者のうち女性が占める割合は16%であり、OECD加盟国の中で最も低い」と示しています。

数年前には、ある大学の医学部を受験した「女性の合格者」の数を意図的に抑制するといった差別的な扱いも浮き彫りになりました。「女性は結婚や出産で職場を離れることがある。そうすると人手が足りなくなる」という意見（理由）を耳にしますが、これは労働環境の整備に係ることであり、女性に対する不当な扱いを正当化する理由にはなりません。

他国の政策や事例を参考とし、種々の問題を解決した先にあるのは、特定の分野の発展だけではありません。固定化した考えから脱却し、幅広い「人材＝才能」が活躍できるようになれば、社会全体の発展が見えてくるはずで